歴史的観光地における視覚障がい者の 観光ガイドを伴った散策の効果に関する考察

石塚 裕子¹・新田 保次²

¹学生会員 大阪大学大学院工学研究科 博士後期課程（〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-1）

E-mail: ishizuka@civil.eng.osaka-u.ac.jp

²正会員 大阪大学大学院教授 工学研究科（〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-1）

E-mail: nitta@civil.eng.osaka-u.ac.jp

本研究では、視覚障がい者は移動を伴う観光行動へのニーズの表明率が低いという既往研究の結果を踏まえて、自身の五感を使って地区の魅力を体得するような楽しい散策経験は、散策意図の向上に寄与すると仮説を設定した。散策の支援策の一つとして観光ガイドに着目し、観光ガイドを伴った散策経験により、当該地の魅力の認知ならびに当該地を散策しようという散策意図の向上に寄与する可能性を検証し、観光ガイドを伴った散策の効果について考察を行うことを研究目的とした。その結果、観光ガイドを伴った散策の経験は、地区の印象や推薦意図の向上を促すことが確認され、視覚障がい者が当該地の魅力を認知することに寄与することが確認された。しかし、散策意図の向上を図ることは難しいことが明らかになった。

Key Words : *universal tourism, tour guides, visually impaired people, historic sites walk*

1. はじめに

(1) 研究の背景

観光地のユニバーサルデザイン化については、2006年12月に採択された「国連障害者の権利条約」¹⁾において、「レクリエーション、余暇及びスポーツの活動に参加することを可能とすることを目的として、適当な措置をとる(第30条第5項)」²⁾と位置付けられていることから明らかのように、その必要性は明確である。

我が国の観光のユニバーサルデザイン化への取り組みは、2000年12月に観光政策審議会が運輸大臣に答申した「21世紀初頭における観光振興方策について」³⁾において、高齢者や障がい者等の人々が安心して気軽に旅行できる環境整備の必要性が謳われ、「観光バリアフリー化の推進」が位置づけられた。また、2008年3月には、「観光のユニバーサルデザイン化 手引き集〜だれもが旅行を楽しめる環境づくりのために〜」⁴⁾が発行された。当該資料では、観光地のユニバーサルデザイン化の取り組みとして、ハード面の改善、ソフト的対応の充実化、地域資源の活用と連携の3本柱による展開が位置づけられている。

法制度としては、2006年12月に「高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律」が施行され移動円滑化基本構想の対象地域が広がり、鉄道駅周辺を中心と

する生活機能集積地区だけでなく、鉄道駅から離れた観光地やレクリエーション地区といった非日常の外出を対象とした地区においても移動円滑化の促進が期待されている。

ユニバーサルデザインとは、提唱者であるロン・メイスによる定義では、「改善や特別な設計などを必要とせずに、最大限可能な限り、すべての人が使える製品や環境をデザインすること」とされている⁵⁾。この定義に基づき、本研究では歴史的観光地⁶⁾のユニバーサルデザイン化とは、『観光地の空間をできるだけ改変することなく、可能な限り、すべての人が楽しめる観光地にデザインすること』とする。歴史的観光地をユニバーサルデザイン化していくには、表-1に示すとおり、様々な対象者に対して、歩行(移動)、情報・コミュニケーション、観光に伴うADL (Activities of Daily Living)⁷⁾に大別される観光を行う上での課題がある。その中で、既往研究においては、歴史的建造物及びその周辺での歩行(移動)環境の状況や、トイレなどADLに関わる設備の整備状況、バリアフリー化整備に対する利用者意識などについての研究が進められている。しかし、その多くは歩行困難者、車いす使用者を主対象としているものが多い⁸⁾。

そのような中、筆者らは既往研究において、文化財の保護などの様々な課題により一般的にバリアフリー化整備が遅れている歴史的観光地を対象に、視覚障がい者の

表-1 歴史的観光地のユニバーサルデザイン化に
配慮すべき対象者と主な課題の関係

		歩行 (移動)	情報 コミュニ ケーション	観光にとも なうADL
高齢者		○		
障がい者	肢体不自由	○		○
	視覚障がい	○	○	
	聴覚・言語障がい		○	
	内部障がい			○
	精神・知的障がい		○	
外国人			○	
妊婦・幼児連れ		○		
子ども			○	

○：対象者にとって特に障壁が多いと考えられる課題

自立的な観光行動の実態とニーズに関する調査を行った。その結果、「施設内部を見学する」、「一定の範囲内を散策する」といった移動を伴う観光行動については、ニーズの表明率が低くなることが明らかになった。また、その要因として、全盲か弱視かといった視覚機能の有無ではなく、過去の経験の有無が、ニーズの表明率に影響を与えている可能性を確認している⁹⁾。

(2) 本研究の目的

歴史的観光地のユニバーサルデザイン化に向けては様々な対象者への配慮が必要であるが、本研究では、既往研究が少なく、歩行（移動）、情報・コミュニケーションにおいて障壁が多いと想定される視覚障がい者を対象とする。

筆者らは、視覚障がい者は移動を伴う観光行動へのニーズの表明率が低いという既往研究の結果を、心理学者Banduraの社会的認知理論に基づく人の行動変容の要因である自己効力感(図-1)の考え方を援用して解釈した。

人はある課題に直面したとき、ある行動がどのような結果を生み出すかという予期（＝結果予期）と、ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまくできるかという予期（＝効力予期）の双方が行動に影響を与えるという。自分がどの程度の効力予期をもっているかを認知したものを自己効力感という^{8),9)}。

視覚障がい者が歴史的観光地において移動を伴う観光行動についてニーズの表明を行わない原因の一つは、歴史的観光地を“移動することで得られる楽しみを知らない”という結果予期が認知されていないためと考えられる。また、“観光地という非日常空間（経験したことがない空間）を移動するという行動を自分ができるとは思わない”という効力予期が認知されていないためと考えられる。

後者は、視覚障がい者にとって移動することは、転倒

図-1 結果予期と効力予期の関係(Bandura, 1977)^{8),9)}

や転落といったリスクを伴うため、効力予期が認知されにくいことは容易に想像できるが、筆者らが行った単独歩行能力が高い視覚障がい者のヒアリング結果では、「視覚障がい者は歩行（移動）することで、空間を認知し頭に地図を描くことができ、街の雰囲気を感じることができる。」という。歴史的観光地という街の雰囲気を楽しむ観光においては、歩行による移動（以下、散策という。）は有用な手段であり、視覚障がい者にとって必要な行動と筆者らは考える。

そこで、実際に散策を経験することにより、地区の魅力を体得できるという結果予期の向上と、観光地において散策を自身を楽しむことができるという効力予期の向上を図り、観光地における散策に対する行動意図を向上させるのではないかと考えた。

そこで本研究では、“観光地での楽しい散策経験は、散策意図の向上に寄与する”と仮説を設定する。

楽しい散策経験とは、必要な援助、介助により観光地の散策を行うことが可能になり、地区の魅力について自身の五感で体得できるものとする。

視覚障がい者の散策を支援する方法は様々なものがあるが、本研究では「観光ガイド」による支援に着目して研究を行った。観光ガイドに着目した理由は、文化財保護や景観保全の観点から、物的な環境変化は難しい歴史的観光地において、導入しやすい施策であること。また、文化財等を有する歴史的観光地では、健常者を主対象とした観光ガイドが既に実施されている地区が少なくなく、これらを改善することで迅速に対応が可能と考えられること。さらに、観光、旅行の形態が多様化する中で観光ガイドをともなう「まち歩き観光」が近年、注目されてきており¹⁰⁾、視覚障がい者のみならず、すべての人に対して効果が期待できるユニバーサルデザインなサービスであると考えられるからである。

本研究は、観光ガイドを伴った散策経験（以下、観光ガイド散策という。）により、散策による当該地の魅力の認知（結果予期の認知）、ならびに当該地を散策しようという散策意図の向上（効力予期の認知）に寄与する可能性を検証し、歴史的観光地のユニバーサルデザイン化に向けた観光ガイド散策の効果について考察を行うことを目的とした。具体的には以下のとおりである。

- ・観光ガイド散策の経験による地区の印象の変化の分析
- ・観光ガイド散策の経験による推薦意図の変化（結果予期の認知）の分析

- ・観光ガイド散策の経験による散策意図の変化（効力予期の認知）の分析

(3) 既往研究における本研究の位置づけ

交通バリアフリー分野においては、鉄道駅のエレベーター等の設置に関する効果の研究¹¹⁾¹²⁾や、歩道のバリアフリー化整備に関する効果の研究¹³⁾など、ハード整備の効果に関する研究が数多くなされている。しかし、ソフト的な対応策の効果に関する研究は少なく、松村・鈴木が案内援助行動のリーフレットによる介助者の態度変容効果について分析している程度であり¹⁴⁾、介助される側の効果を分析した研究は少ない。

一方、観光ガイドに関する研究は、富川は、京都府福知山市で開催されたモニターツアー参加者に対するアンケート調査を通じて、ガイド付き観光によって商品価値が高まる観光資源を明らかにしている。その結果、社寺、および自然と人文の複合資源に対して有効であったとしている¹⁵⁾。また、田口らは、WEB調査を通じてガイドを利用する観光客の評価の把握を行った。その結果、観光ガイドは観光客の満足度を向上させ、観光地に対して良い印象を与えていることが明らかとなり、人と人とのコミュニケーションによる情報提供は、ガイドの人柄と地域の魅力を伝えようという熱意が観光地の評価を高めるとしている¹⁶⁾。さらに、井川らは森林散策を対象に単独散策と案内人散策による散策空間の印象の違いをSD法で、散策によるストレス緩和効果を唾液中のコルチゾール濃度により比較分析を行っている。その結果、散策空間から受ける印象の違いは確認されなかったが、ストレスの緩和効果については、単独散策よりも案内人散策のほうに効果がある可能性が示唆されている¹⁷⁾。これらの既往研究より、観光地におけるガイドを伴った散策は一定の効果が確認されているといえる。しかし、視覚障がい者など、何らかの機能に制約がある人など、多様な人すべてに効果があるかどうかについての研究は行われていない。

以上のことから、本研究は、交通バリアフリーの分野において既往研究が少ないソフト面の対応策の効果について、健常者を対象に一定の効果が認められている観光ガイド散策を対象に、視覚障がい者の観光地における行動意図の視点から評価を試みた点で新規性があるといえる。

2. 調査の概要

本研究は、岡山県倉敷市美観地区（以下、美観地区という。）を対象に行った。美観地区は、江戸時代に天領として栄え、今も昔と変わらず美しい伝統的な街並みを

有している。美観地区の観光客数は約 320 万人／年であり、日本の代表的な歴史的観光地である。美観地区は、区域内に美術館や博物館、観光関連の商業施設等が集積し、筆者が定義する歴史的観光地に該当する地区である。しかし、美観地区には、視覚障がい者が観光行動を行うのに様々なバリアがあることが既往調査からわかっている¹⁸⁾。

(1) 調査方法

調査は、観光ガイド散策の経験前後において、視覚障がい者、一般来訪者それぞれにアンケート調査を行った（表-2）。視覚障がい者については、介助者が設問ならびに選択肢を音読することで対応している。

一般来訪者の調査は、倉敷地区ウエルカム観光ガイド連絡会（以下、連絡会と示す。）が常時実施している「定期便」に参加した人を対象に行った。定期便とは、月曜日を除く毎日午前 9 時 30 分と午後 1 時 30 分にスタートするコースで、事前予約をしなくても 1 名から参加することができる。所要時間は 1 時間 30 分程度であり、外部の街並みを散策、解説するのみで、有料施設の内部は見学しないコースである。

一方、視覚障がい者の調査は、倉敷市視覚障がい者協会（以下、協会と示す。）と、連絡会がタイアップして試行したイベントに同行して行った。本イベントは、視覚障がい者に美観地区の魅力を知ってもらい、楽しんでもらうことを目的に、協会の行楽行事の一環として実施されたものである。イベントの概要は、表-3 に示すとおりである。連絡会が日頃、定期便で案内している観光コ

表-2 アンケート調査の概要

	視覚障がい者	一般来訪者
実施日	2009年10月11日	2010年5月下旬～6月中旬
回収数	25名	78名
設問（共通）	○過去の訪問経験 ○美観地区の印象 ○美観地区の街並みのイメージ 落ち着いた-浮ついた 親しみのある-よそよそしい 美しい-醜い 安全な-危険な 快適な-不快な ○散策意図 1) 晴目者（誰か）と一緒に 2) 一人で ○推薦意図 ○個人属性（年齢、性別）	
設問（非共通）	○個人属性 ・日常の外出頻度 ・視覚障がいの程度 ・歩行能力	

ースを基本に、安全面などを考慮して若干の変更を行ったモデルコース(約 1km)を設定し、コース上に 7 ヶ所の体験ポイントを計画した。モデルコースは、視覚障がい者向けの観光ガイドを既に実施している宇治観光ボランティアガイドクラブのガイドに同行して得られた、表-4 に示す配慮すべきポイントを考慮して設計した。7 ヶ所のポイントでは、手で触れたり、話を聞いたり、立体コピーを用いたりすることで、当該地の魅力を視覚以外の機能で体得できるように配慮を行った。

(2) 回答者の属性

回答者の属性は表-5 に示すとおりである。視覚障がい者は男性 6 割、女性 4 割で、年齢は 50 代、60 代で 80%を占めている。一般来訪者の男女比は約半数ずつ、年齢は 20 代から 70 代まで幅広く分布しているが、50 代と 60 代が全体の約 60%を占めている。

(3) 美観地区の訪問経験

美観地区の訪問経験は表-6 に示すとおり、視覚障がい者の全員が岡山県内在住者のため、約 85%の人は過去に訪問経験があり、約半数の人が 2 回以上来訪した経験をもつ。一方、一般来訪者は、9 割以上の者が県外からの来訪であったが、初めて来訪した人とリピーターが約半数ずつであった。しかし、一般来訪者は 2 回以上の訪問経験がある人は少ない。

表-3 視覚障がい者に配慮した観光ガイドの実施概要

実施日	2009 年 10 月 11 日 (日)
参加者	視覚障がい者 :34 名 (岡山県在住者) 介助者:12 名
観 光 ポ イ ン ト	1) 学芸員より美術館の歴史解説を聴く 2) 学芸員より彫刻の解説と彫刻に触る 3) 欄干の彫刻に触れる 4) 蔵の壁面構造の解説と壁に触れる 5) 煉瓦倉庫の煉瓦積み工法の解説を聞き、壁に触れる 6) 岸壁跡の解説と触れる 7) 伝統的建築物について立体コピーで解説

表-4 視覚障がい者へのガイドの配慮すべき事項

1	触ることが可能なものについては、触れることで材質や大きさなどを理解し、対象物に対して興味や理解が深まる。
2	対象物に接近する、その周りを歩くことなどにより、空間の把握を行う。
3	口頭による説明加えて、模型や立体コピーは効果的である。ただし、シンプルなもの、壊れにくいなど、遠慮なく触れることができるものが望ましい。
4	地区全体の空間構成を把握することが難しいため、随時、位置関係について補足説明するほうがよい。
5	見て理解するよりも少し時間がかかるため、時間的余裕をもってガイドすることが重要。

3. 結果と考察

(1) 地区の印象の変化

地区全体の印象については、7 件法 (非常に良い 7 点 - 普通 4 点 - 非常に悪い 1 点) で回答を得た。また同様に、街並みの印象について、印象を表わす 5 つの対の形容詞の評価尺度それぞれについて 7 件法 (非常に 7 点 - 同程度 4 点 - 非常に 1 点) で回答を得た。得られた回答について、観光ガイド散策の経験前後における変化ならびに視覚障がい者と一般来訪者の差について比較分析を行った(図-2、表-7)。

経験前後の変化では、視覚障がい者は地区の印象及び街並みの印象を表わす全ての形容詞について、良い印象に変化する傾向が確認された。対応のある 2 変数であることから Wilcoxon の符号付順位和検定で有意差について検定を行ったところ、地区全体の印象ならびに快適性 (不快な - 快適な) について統計的に有意な結果となった。同様に、一般来訪者も経験前後において、すべての項目で良い印象に変化する傾向が確認され、安全性(危険な - 安全な)を除いてすべての項目が統計的に有意な結果となった。

表-5 回答者の属性

		視覚障がい者 (25人)	一般来訪者 (78人)
性別		男性15人(60%) 女性10人(40%)	男性35人(44.9%) 女性40人(51.3%) 無回答3人(3.8%)
年 齢	20代	0人(0.0%)	3人(3.8%)
	30代	0人(0.0%)	9人(11.5%)
	40代	3人(12.0%)	14人(17.9%)
	50代	10人(40.0%)	20人(25.6%)
	60代	10人(40.0%)	26人(33.3%)
	70以上	2人(8.0%)	4人(5.1%)
	無回答	0人(0.0%)	2人(2.6%)
居住 地	県内	25人(100.0%)	4人(5.1%)
	県外	0人(0.0%)	74人(94.9%)
単独行動の 可否	可能	16人(64.0%)	
	不可能	9人(36.0%)	
障がいの程度	全盲	14人(56.0%)	
	弱視	11人(44.0%)	

表-6 訪問経験

訪問回数	視覚障がい者 (25人)	一般来訪者 (78人)
0回	4人(16.0%)	43人(55.1%)
1回	8人(32.0%)	28人(35.9%)
2~4回	4人(16.0%)	4人(5.1%)
5~9回	2人(8.0%)	1人(1.3%)
10回以上	7人(28.0%)	0人(0.0%)
回数不明	0人(0.0%)	2人(2.6%)

視覚障がい者と一般来訪者が感じる印象に有意に差があるかについて確認するため、表-7 に示すとおり、Wilcoxon の順位和検定で検定を行った。その結果、観光ガイド経験前は、親しみやすさ（親しみのあるーよそよそしい）以外の項目について、一般来訪者のほうが統計的に有意に良い印象を持っているという結果となった。同様に、経験後においても、視覚障がい者、一般来訪者ともに印象の評価が高くなったため、すべての項目で一般来訪者のほうが視覚障がい者よりも統計的に有意に良い印象を持ったという結果となった。

(2) 推薦意図（結果予期の認知）の変化

観光ガイド散策を経験することで、当該地の魅力の認知（結果予期の認知）の変化を確認するため、「知り合

いに訪問することを勧めたいと思うか（推薦意図）」についても回答を得た。これは、旅行・観光におけるの購買後の評価は、他の有形財の消費とは異なり、サービスの購入と同時に消費され、返品することはできないことから¹⁹⁾、購買後の評価は、経験を他の人々へ伝えることで評価する、いわゆる口コミが一般的な評価指標になると考えた。推薦意図は散策意図と同様に7件法で回答を得ている。その結果、視覚障がい者(4.82→6.00)、一般来訪者(5.85→6.67)ともに経験後は平均値が上昇し、有意水準5%で有意となった。これは、観光ガイド散策を経験することにより、その効果を認知したと考えられる。

(3) 散策意図（効力予期の認知）の変化

観光ガイド散策を経験することにより、観光地における散策行動に対する効力予期が向上し散策意図の向上に寄与する可能性を検証するため、散策意図について「とてもそう思う」から「全く思わない」の7件法で回答を得た。視覚障がい者の歴史的観光地における散策には、介助者がいるか否かで、行動にともなうリスクが大きく異なることから、「晴眼者が同行する場合」と「原則一人で行う場合」の二段階で質問を行った。

その結果、図-3 に示すとおり、視覚障がい者の観光ガイド散策経験前後における変化は、晴眼者と一緒の場合は平均値が上昇(5.95→6.14)したが、原則、一人で行動する場合は、平均値は低下(2.86→2.41)した。事前事後の評価の差について、対応のある2変数としてWilcoxonの符号付順位和検定で検定を行ったが、いずれも統計的な有意差は確認できなかった。一方、一般来訪者の経験前における散策意図は、図-4 に示すように、誰かと一緒の場合は平均値が上昇(6.13→6.61)し、同様に一人で行う場合も平均値が上昇(4.62→4.94)し、統計的に有意差が確認された。本調査結果から、観光ガイド散策の経験は、視覚障がい者の観光地における散策意図の向上（効力予期の認知）には寄与しなかったと考えられる。

図-2 地区の印象の変化

表-7 地区の印象の平均値と差の検定結果

	視覚障がい者			一般来訪者			視覚障がい者と一般来訪者の評価点の差の有意確率		
	(1)事前	(2)事後	有意確率	(3)事前	(4)事後	有意確率	事前(1)と(3)	事後(2)と(4)	
印象が悪い	4.50	5.55	.001**	6.06	6.57	.000**	.000**	.000**	印象がよい
浮ついた	4.85	5.35	.075	5.87	6.34	.000**	.000**	.000**	落ち着いた
よそよそしい	5.11	5.35	.248	5.55	6.37	.000**	.087	.000**	親しみのある
醜い	5.05	5.44	.102	6.22	6.62	.000**	.000**	.000**	美しい
危険な	3.74	4.35	.065	6.01	6.20	.125	.000**	.000**	安全な
不快な	4.70	5.10	.033*	5.96	6.29	.002**	.000**	.000**	快適な

有意確率（両側） *：5%有意 **：1%有意

図-3 視覚障がい者の散策意図、推薦意図の変化

図-4 一般来訪者の散策意図、推薦意図の変化

(4) 視覚障がい者の散策意図の特性

観光ガイド散策の経験前後において、平均値では散策意図の向上が確認できなかった視覚障がい者の散策意図の得点分布は、図-5と図-6に示すとおりである。

晴眼者が同行する場合の散策意図は「思う」に偏っており、原則一人の場合は「思わない」に偏っている。その傾向は観光ガイド散策の経験前後においても大きな変化はなかった。

散策意図の変化量（経験後－経験前の値）と障がいの程度（全盲・弱視）についてクロス集計を行ったところ、サンプル数が少ないため統計的検定は行えないが、表-8に示すとおり、弱視者には散策意図が低下した者がいないのに対して、全盲者では4名の者が観光ガイド散策経験後に散策意図が低下している。

図-5 晴眼者と一緒の場合の散策意図の分布

図-6 原則一人の場合の散策意図の分布

表-8 散策意図の変化量と障がいの程度

	低下	変化なし	向上	計(人)
全盲	4 28.6%	9 64.3%	1 7.1%	14 100.0%
弱視	0 0.0%	5 62.5%	3 37.5%	8 100.0%

4. 結論

本研究は、観光ガイド散策の経験による、当該地の魅力の認知の向上（結果予期の認知）、ならびに当該地の散策意図の向上（効力予期の認知）に寄与する可能性を検証し、歴史的観光地のユニバーサルデザイン化に向けた観光ガイド散策の効果について考察を行うことを目的に、観光ガイド散策の経験前後においてアンケート調査を実施し、以下のような結論が得られた。

(1) 地区の印象の変化

本研究の結果から、観光ガイド散策は、視覚障がい者、一般来訪者ともに、当該地の印象を向上させる効果があることが明らかになった。その効果は、一般来訪者のほうが高い傾向にあった。

経験前の地区の印象は、視覚障がい者は一般来訪者より相対的に低い傾向にある。これは視覚による認知が難しいことと、県内在住者が多いことが影響したと考えられる。

しかし、視覚による認知ができない視覚障がい者にとって、観光ガイド散策を行うことにより、聞いたり、触れたり、自身の五感を通じて体得することは、地区の印象を向上させるのに有用であると考えられる。

(2) 推薦意図の変化（結果予期の認知）

観光ガイド散策を経験することで、(1)で示した通り地区の印象が向上したため、他者への推薦意図も有意に上昇したと考えられる。この結果は、観光ガイド散策により地区の魅力を認知できた、いわゆる結果予期が認知されたと考えられ、観光ガイド散策は有用であるといえる。

(3) 散策意図の変化（効力予期の認知）

散策意図については、一般来訪者には効果が確認できたが、視覚障がい者には、効果が確認できなかった。

この結果は、本調査が実施した観光ガイド散策の経験だけでは、当該地を散策できるという効力予期の認知は図れなかったことを意味する。つまり視覚障がい者にとって観光地における散策に対して自己効力感を持つことは、かなり難しいと推測される結果となった。特に全盲者にその傾向が強く確認された。

(4) まとめ

本研究の結果より、本研究で実施した観光ガイド散策は視覚障がい者にとって地区の魅力の認知の向上（結果予期の認知）には寄与するが、散策意図の向上（効力予期の認知）を図ることは難しいことが明らかとなった。

散策意図が向上しなかった要因は様々なものが想定されるが、自己効力感の概念を考慮すると、今回実施した観光ガイド散策は「自分は散策できる」という遂行可能感を感じさせることができなかったといえる。

広瀬が博物館等でガイド案内を受けた経験を通じて、見学者のペースで見学できるように配慮することや、「つれられている」感じではなく見学者に主導権を与えることの必要性について指摘しているように²⁰⁾、今回の観光ガイド散策には、選択性や自律性への配慮が不足し、自身による行動達成感が感じにくいものであっ

たとえられる。

しかし、一般来訪者と比較して、地区の魅力の認知度が低いと推測される視覚障がい者にとって、観光ガイド散策は、地区の魅力を体得する支援策としては効果があり、散策行動への結果予期の認知に寄与したと考えられる。

5. 今後の課題

本研究では、観光ガイドを伴った散策の経験前後において、地区の印象の変化ならびに推薦意図と散策意図への効果を検証した。

このため、観光ガイドそのものの効果を把握するには至っていない。今後は、観光ガイドを伴わない場合や観光ガイドの内容や方法についていくつかのパターンを設定して効果検証を行うなど、具体的な改善提案に結び付けるための分析が必要である。

また、当該地の訪問回数、居住地、年齢及び当該地の魅力度など、散策意図に影響を及ぼす可能性のある他の要因との関係性についてもさらなる詳細な分析が必要である。

謝辞：本研究の実施にあたっては、倉敷地区ウエルカム観光ガイド連絡会ならびに倉敷市視覚障がい者協会の皆様に多大なるご協力いただきました。皆様に心から感謝いたします。

注

[1] 伝統的な街並みや歴史的建造物、寺社仏閣等が主要な観光資源となっている地区で、それらの資源が徒歩圏内に複数又は面的に集積していることから、まちの歴史や風情を、歩きながら体得できるような、ほどよい密度の空間を有する地区。

[2] ADL とは、食事・更衣・移動・排泄・整容・入浴など生活を営む上で不可欠な基本的行動のことをいうが、ここでは旅行・観光を行う上で、観光目的以外に必要な移動を除いた日常生活動作を対象と考える。例えばトイレや入浴など。

参考文献

- 1) 国連障害者の権利条約, <http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/rights/adhoc8/protocol.html>
- 2) 障害のある人の権利に関する条約仮訳：川島聡＝長瀬修 仮訳（2008年5月30日付）, <http://www.normanet.ne.jp/~jdf/shiryo/convention/>
- 3) 国土交通省：21世紀の初頭における観光振興方策について, http://www.mlit.go.jp/kisha/oldmot/kisha00/ko-ho00/tosin/kansin/index_.html, 2000.

- 4) 国土交通省総合政策局：観光のユニバーサルデザイン化手引き集，2008.
- 5) The Center for Universal Design, <http://www.ncsu.edu/>
- 6) 石塚裕子，新田保次：歴史的観光地における視覚障がい者の行動の実態とニーズに関する基礎的研究，土木計画学研究・論文集，Vol.27, No.2, pp.365-374, 2010.
- 7) 秋山哲男，松原悟朗，清水政司，伊澤岬，江守央：観光のユニバーサルデザイン，学芸出版，2010.
- 8) Bandura, A.: Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change, *Psychological Review*, Vol.84, No.2, pp.191-215, 1977.
- 9) 坂野雄二，前田基成 編著：セルフ・エフィカシーの臨床心理学，北大路書房，2002.
- 10) 茶谷幸治：まち歩きが観光を変える，学芸出版社，2008.
- 11) 磯部友彦：バリアフリー化された鉄道駅内の昇降装置の設置効果，土木計画学研究・講演集(CD-ROM), Vol.31, 2005.
- 12) 榊井敦，三星昭宏，柳原崇男，堀岡真義：身体的負荷からみた鉄道駅のバリアフリー施設における経済的評価に関する研究，土木計画学研究・講演集(CD-ROM), Vol.35, 2007.
- 13) 池田宏史，三星昭宏，池田肇，石塚裕子，堀井孝郎，中迫勝：歩道のバリアフリー化前後の身体障害者，高齢者，介護者の通行行動と生理負荷の比較，交通科学，Vol.37, No.1, pp.71-76, 2006.
- 14) 松村暢彦，鈴木義康：交通バリアフリーにおける介助・援助行動の促進に関する研究，土木計画学研究・論文集，Vol.23, No.4, pp.1041-1047, 2006.
- 15) 富川久美子：観光資源の評価におけるガイド付き観光の有効性，京都創成大学紀要第7巻，2007.
- 16) 田口秀男，木村一裕，日野智：Web 調査による観光ガイドの評価に関する研究，土木計画学講演集(CD-ROM), Vol.40, 2009.
- 17) 井川原弘一，香川隆英，高山範理，朴範鎮：森林散策における案内人がもたらす効果に関する研究，ランドスケープ研究日本造園学会誌，Vol.70, No.5, pp.597-600, 2007.
- 18) 倉敷市：倉敷市美観地区バリアフリー整備計画，2008.
- 19) ボニータ・M. コルプ(著)，近藤勝直(翻訳)：都市観光のマーケティング，多賀出版，2007.
- 20) 広瀬浩二郎：触る門には福来たる，岩波書店，2004.

(2011.2.25 受付)

EXAMINATION OF THE EFFECTS OF WALKING AROUND WITH TOUR GUIDES FOR VISUALLY IMPAIRED PEOPLE AT HISTORIC SITES

Yuko ISHIZUKA and Yasutsugu NITTA

We knew from previous research that visually impaired people did not want wide range tour activities such as walking through area. In this study, we have the hypothesis that good experiences through five senses are made to contribute to any rise in intent to walk. This study focused on walking around with the tour guides and aimed to clarify the effects of intent to walk around for visually impaired people. As a result, following issues were clarified. The experience of walking around with tour guides could support the increasing better impressions for the area and "Intent to recommend to others", and was effective to find the glamour of the destination for the visually impaired people. On the other hand, they did not contribute to any rise in intent to walk the area.